

第3回「大人が変わるためのセミナー」



以下はセミナーの概要です。

1 日本・アメリカ・韓国の教育環境について

伊藤：教育の柱は人格の完成にあり、その要素として知・徳・体がある。知育では、知識か知恵の重視か、学習指導要領の変化でも揺れがあり、学校でも迷いがある。徳育は東日本大震災の日本人の行動力を見ると全体的にすばらしいと思うが、いじめ、体罰等深刻な問題がある。体育は、最近では食育の重視ということもある。

鄭：韓国では、目上、祖先への孝や友愛に対する強烈な教育があり（韓国的儒教思想）、身内にも敬語を使う言語スタイルがある。

学校では大学受験を重視した教育がなされ、塾が隆盛し夜遅くまで小学生から勉強しており、学校教育への不信感がある。また、グローバル化の高まりから英語が重視され、異常な状態と感じるくらい神経質になっている。

富良謝：学校より家庭を先に考える。第一の教育者は家庭。親が子をほめることが教育。このことで子どもに自信と自立を促す。子どもを絶対バカにしない。失敗を励ますことが成功の手段である。宿題終わるまでテレビを見ないなど、家庭のルール守らせる。これで子どもが正しいこと、正しくないことがわかる。アメリカでも社会問題いろいろあるが、子どもの自立心は強い。

1月19日(土)、今年度最後の「大人が変わるためのセミナー」が青少年会館で開催されました。前日からの大雪で、参加者の皆さんには交通事情等、大変な中でのセミナーとなりました。

今回は「子ども・若者の自立と家庭・社会」をテーマに、パネルディスカッションが行われました。パネリストとして富良謝 純先生（福島大学講師、桜の聖母短大名誉教授）、鄭 玄実先生（「ふくかんねっと」理事長、福島大学講師）をお迎えし、コーディネーターを当県民会議の伊藤末吉（青少年育成専門指導員）が担当しました。

るあるが、子どもの自立心は強い。

2 日本の現代の子ども・若者について心配なこと

富良謝：学生の想像力が弱い。英語の書き取りで、中にはわからない単語あるが、前後の文脈から考えることができない。なぜないか。子どもの時からテレビをよく見ている。テレビは想像力が必要ない。本を読むことが必要。本は想像力が必要。

鄭：富良謝先生の本を読むというのは、息子をみてて大事なことと思う。根本的なことは親子の関係にあるのではないか。特に日本の母親と子の関係を見ると、強く指導できる関係になっていない。子どもに気を遣っている。日本の家庭教育では親子関係に難しい問題がある。テレビ、携帯、パソコンについて息子には条件と制限与えた。日本では、母親はあきらめていないか。

3 自立支援のために大切なこと

富良謝：大学の授業で、学生は質問の手を挙げない。小学校から自分の意見を出さない。教師は出させない。

EDUCATION の意味は子どもの中から引っ張り出す。教育の目的は、考えさせる。自分の意見を持つ。そのことは小学校からはじめなければならない。

鄭：日本の子どもが元気がないと言われる。一つの原因は、日本語のコミュニケー

ションスタイルにあるのではないか。出しやばらない。喜怒哀楽をストレートに出さない。頭で考える、理解する教育に偏っているのではないか。特に語学教育は実際的な部分が弱い。語学は体で覚えるもの。

自立で大切なものは、自分を知るために、他を知ることの多くを経験する教育があると良い。福島の人々の人は福島は何もないところというが、他からきた私は沢山の素晴らしさを感じる。異文化理解は必ずしも海外ではない。交流をふんだんに取り入れる。

教育のせいばかりにできない。文化の問題だとしたら他を知るといふことも必要である。

伊藤：いわき地区では親子の未来創造塾といい、子どもの活動と保護者の応援講座をシリーズで4回実施した。また、学童保育的なものを実践している例である。子ども同士でルールを決めて過ごす。学校に行っていない子も来ている。地域で子どもを見守り、自立に協力する優れた取り組みをしている。

福島県青少年総合相談センターより

相談員の独り言

去る1月28日～2月1日の5日間、内閣府主催の「困難を有する子ども・若者の相談業務に携わる民間団体職員研修」に参加させていただきました。全国各地から百名を超す支援者が一堂に会し、不登校、ひきこもり、発達障がい、精神疾患、虐待、DV、依存症等、いくつもの問題が複雑に絡み合うケースについて議論しました。経験年数や専門の違いはありますが、困難を抱える家族を支援する立場にある専門家たちと、真剣に議論できたことは有意義でした。

研修の中で強く感じたこと、それは「支援者への支援が不足している」ということでした。多くの相談者は、なかなか事情を他人に話したがるので、いざ支援者が関わり出す頃には、単純であったはずの問題が複雑になってしまっているものが少なくありません。ひとつの片結びだったはずの紐が、いくつもの紐といくつもの片結びによって絡み合ってしまう。順番を間違えて新たに結び目ができてしまったり、解けたと思っていたところが他のところを動かしたことで、また結び目になってしまったりと、容易に解くことはできません。

例えば、チームでそれぞれに結び目を解いていたり、それを俯瞰的に見渡して順番を指示できるコーディネーターの役割があると、ありがたいものです。すなわち、

相談員 北部大輔

家族が抱える問題の多様な側面に複数の専門家がアプローチし、それを統合することが必要になるということです。

元来、教育や子ども・若者支援という分野は目に見える形で経済的なものではありません。ひきこもりの状態を脱したからといって、当事者からお金が支払われるわけでもなければ、万人に対して効率よく効果的な手立てがあるわけでもないでしょう。一つひとつのケースに対して手を変え品を変え、目も手もかけて、持ち出しの時間とお金をかけて、よろしくない現状を打破すべく支援者が動き回る。そこに志と誇りがなければ、継続していくことは難しいものです。

しかし、職員にも生活があります。志と誇りだけでご飯は食べられません。研修では、民間団体がいかにして事業財源を確保するか、助成金や補助金を獲得することについての講義も行われました。事業を作り出し助成金を獲得するためには、初めの持ち出しが必要であることが語られたが、いかにも効果のある無しを重視する現代社会を反映していると感じた。一方で、「何かを始める時に、予算がないといった時点で、その人にはやる気もない」という言葉が痛快であった。自分の仕事に誇りを持ち、志があるからこそ、財源には関わりなくやれることはやる、という姿勢が生まれるのではないのでしょうか。



新年度も「各事業」、「青少年ふくしま」とともに充実した内容となるよう努力してまいります。御協力、御支援をよろしくお願いいたします。

